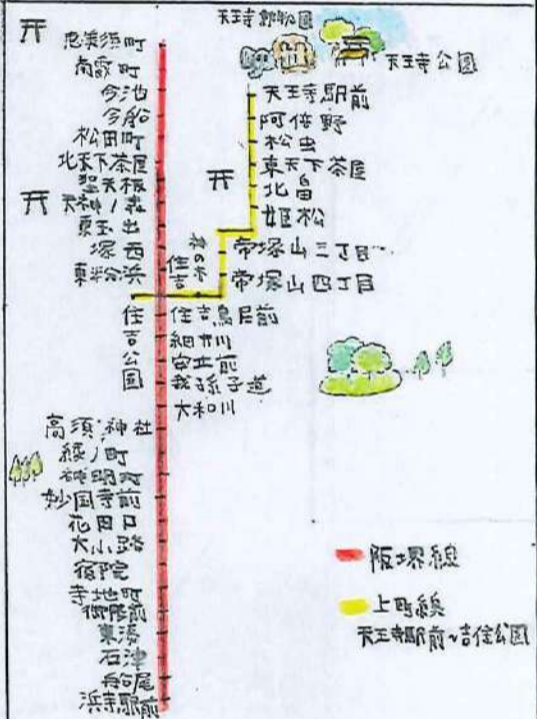


走れ モノモノ 電車

2023年
8月18日
金曜日
August
SMTWTFSS
1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12
13 14 15 16 17 18 19
20 21 22 23 24 25 26
27 28 29 30 31

和賀田小学校
5年1組
籠谷真瑠月



100歳まで五年モノモノ了

「100歳の誕生日を迎えさせてやりたい」クラウドマンニングがその思い叶える。

二〇二二年四月十四日、モノモノ号の大規模修繕工事費用を支援していただくためのクラウドマンニングでのプロジェクトの目標を達成。

本と五年で100歳を迎える阪堺電軌のモノモノ号。この電車は、国内現役最古といわれている。古くから阪堺線の路線を支えてきた歴史ある電車である。

もちろん、100歳に近い電車なので、老朽化が進んでいる。そのため、大規模修繕工事が必要となった。しかし、修繕工事に必要とされる金額は七十八万円とあまりにも高額だった。それでも、この電車を一修繕費が同額だから」といって、腐蝕に耐えるわけにはいかない。それは、この「モノモノ号」は世界的に見ても稀有な存在であるからだ。

そこで、阪堺電気軌道株式会社はクラウドマンニングを通じて費用を支援してもらおうとした。しかし、クラウドマンニングが開始する十六日間に目標達成。その後、支援は伸び続け、最終的には三十九万七千七百円が、八十八人によって支えられた。支えられた資金は主に木製客車の乗降扉の腐食や外板の腐食、塗装劣化の修繕資金として使われる。また、当初の目標を上回って、支障をなくしては、扉や外板塗装以外にも、モノモノ号には修繕する必要がある箇所がある。その修繕費用の一部として使用される。

阪堺電車のシンボル 乗客も自覚

二八年から製造されたモノモノ号は、アナンバーである。阪堺電軌は現在、恵美須町と海寺駅間の阪堺線と天王寺駅前と住吉線の上下野線の二路線を運営しているが、当時は南海鉄道(現・南海電気鉄道)の一部だった。その上、この頃は二路線に抑えても、一路線、阪堺線の今池停留所から平野に向かう平野線も運営。沿線開拓が進むに従って、乗客も急増していた。



この頃、三路線を走る車両は少く、大型化されると共に、平野線では二両連続運転を計画。このため、製造されたのが、モノモノ号である。取柄の特徴は「総括制御」ができるようになったこと。連結時に前の車両が一括制御ができ、運転士が一人で、すむようになった。強力なモーターを四つ搭載し、大型の車体には自動ドアを備え、最新の装備が盛り込まれていた。最新の装備が盛り込まれていた。最新の装備が盛り込まれていた。

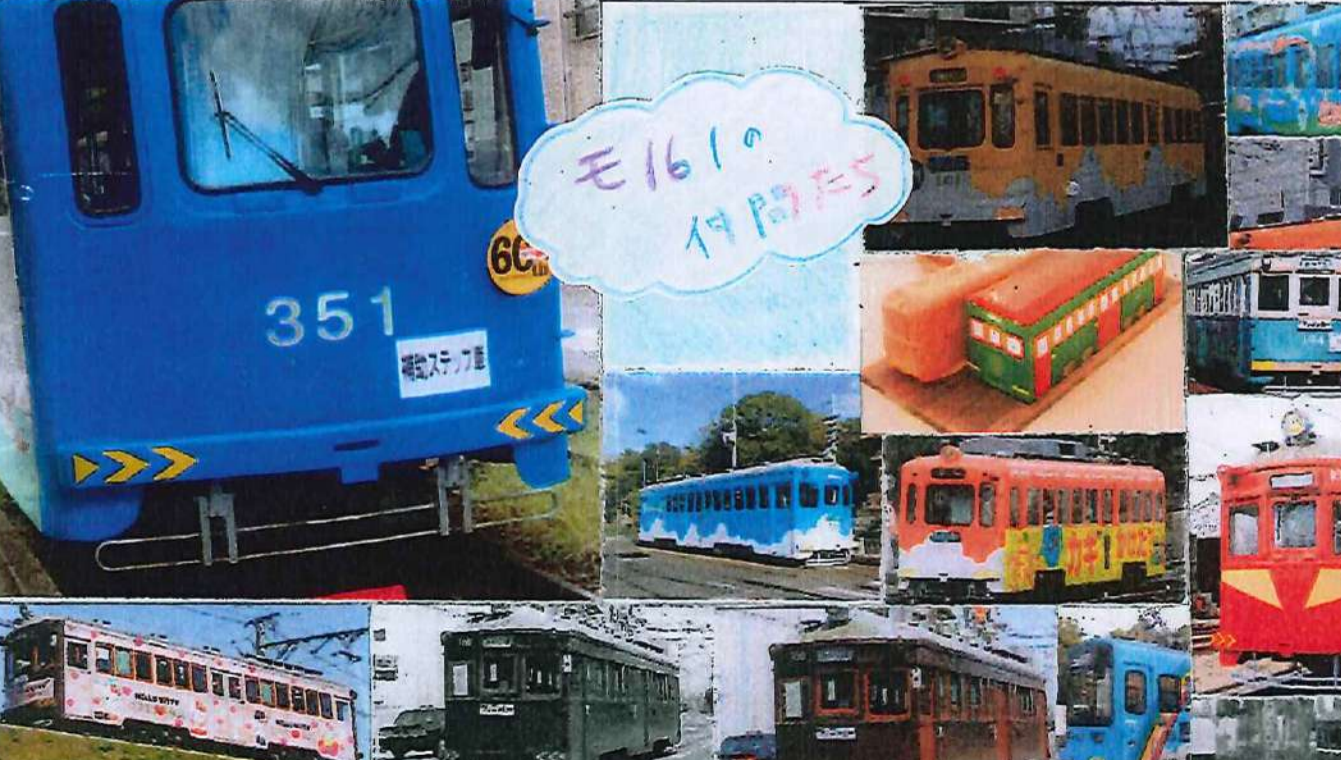
戦後もモノモノ号は変わることなく平野線を中心に三路線で活躍し続けた。だが、自動車が増え、バスも増え、路面電車は少く、やがて、かきもの、と扱われるようになった。一九八〇年には、大阪市営地下鉄の谷口線が開業したのに合わせて、並行する平野線が廃止。残る二路線は経営の効率性を図るために南海と分離し、阪堺電気鉄道として再スタートを切った。

「立ちはだかる修繕の壁」その後、利用者の減少により、必要な車両数が減ったことから、モノモノ号は徐々に引退。一部は企業などに譲渡され、保存されている。残る車両は一部が登場時の塗装に戻され、また、線道の下にあって、かつての南海電車カラーとなった。注目を集めていた。二〇二二年には、阪堺線の開業一〇〇周年を記念し、トップアナンバー、である「モノモノ号」を一九六五年頃の姿に復元。

復元後のモノモノ号は、色々な場面で活躍。しかし、復元から十年経つと、あちこちに腐食が目立つようになる。特に、木製客車の扉は腐食が進んで、いるほか、外板や屋根の塗装面などの劣化もあつた。

このため、同社は大規模修繕工事を実施する。準備を進めたのが、モノモノ号のモノモノ号。運輸収入が激減する中、他の電車や路線などの制備費用に手回し、はいという状態でも、モノモノ号の修理費用を捻出することはできない。しかし、二〇二二年で九十三歳を迎えてなお現役の同車は、歴史的にも貴重な存在。モノモノ号の100歳の誕生日を迎えさせてやりたいという思いが、同社はクラウドマンニングという形で修理費用を集めた。目標金額は七十八万円に設定。目標額を下回った場合でも修繕は断念せず、残りの金額は阪堺電軌が負担する。工面など、目録額の半分程度は集まってきた。という。社内の声もあつたという。

「注目の内訳」クラウドマンニングが、三月三〇日から予想を越えるか、上回る速さで寄付が集まり、あつた。十六日後の四月十四日には目標を達成。その後、支援額が伸び続け、六月二日には二〇〇万円を突破している。



モノモノ号の100歳記念

「注目の内訳」クラウドマンニングが、全国の有識者や個人に支援を呼びかけ、今度も目標を取り組むは増えてゆく。九三年という長い時間の中で、モノモノ号はたくさんの人々の記憶に残り、その思い出と共に入生を歩んできたという感じがうかがえる。